

大学生における「甘え」と「先延ばし」の関係に関する研究

臨床心理学専修 P09616 古屋敷 恒平（指導教員 玉瀬耕治教授・大久保純一郎教授）

問題と目的

「甘え」の問題は、土居健郎がその著書である『「甘え」の構造』（1971）で取り上げて以来、多くの研究がなされている。「甘え」は当初、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである（土居，1971）」と定義されていた。だが、その意味の曖昧さから後に「人間関係において相手の好意をあてにして振舞うことである（土居，2001）」と再定義されている。この「甘え」を対象とした研究には、「大学生の『甘え』と特性5因子の関係」（玉瀬・相原，2004）や、「大学生の『甘え』と友人関係」（玉瀬・富平，2007）、「高校生における『怒り』と『甘え』の心理的関連について」（土居，2008）などがある。

一方、「先延ばし」は我々にとっては非常に身近なものであるといえる。特に課題を与えられる機会の多い学生にとっては、日常的に経験することの多い問題である。「達成すべき課題を遅らせる非合理的な傾向（Lay，1986）」や「理由もなくものごとを遅らせる、怠惰で自滅的な習慣（Tice & Baumeister，1997）」などと定義され、不適応的な特性傾向として捉えられてきた。この「先延ばし」を対象とした研究では、「先延ばし」と「失敗過敏」との関連（藤田，2008）が示唆されている。さらに、近年では「先延ばし過程に

おける意識の変化の検討（小浜，2008）」などのように、先延ばしをプロセスとして捉える研究も進んでいる。また小浜（2008，2010）は「先延ばし意識特性尺度」を作成し、特性5因子におけるN因子とC因子との関連を検討している。

「甘え」と「先延ばし」の研究はどちらも積み重ねられているものの、この双方を関連付けた研究は筆者が知る限りいまだなされていない。そこで、本研究では大学生を対象とし「甘え」と「先延ばし」がどのように関連しているのかを検討することを目的とする。

方法

1. 調査時期

2010年6月中旬及び7月下旬

2. 研究対象

近畿圏の私立大学に在籍している大学生188名（男性77名、女性111名）。

3. 調査内容

- ①フェイスシート。調査協力の同意と基本情報（性別、学年など）を得るために使用する。
- ②多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）。全20項目、4件法での回答を求める。
- ③先延ばし意識特性尺度（小浜，2008）。全47項目、5件法で回答を求める。

結果と考察

多元的「甘え」尺度と先延ばし意識特性尺度との関連を検討するため、相関分析を行った。その結果を表1として以下に示す。

表1：「相互依存的甘え」、「屈折した甘え」と先延ばし意識特性尺度各因子間の相関

	前・否定	計画性	楽観視	中・否定	中・肯定	後・否定	切り替え
相互依存	.22**	.06	.20**	.31**	-.04	.31**	.03
屈折	.39**	-.01	.04	.37**	-.07	.23**	-.13

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）

*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）

分析の結果、「相互依存的甘え（健康的な「甘え」）」と「先延ばし前の否定的感情」、「状況の楽観視」、「先延ばし中の否定的感情」、「先延ばし後の否定的感情」との間で、それぞれ弱い正の相関がみられた。また、「屈折した甘え（不健康な「甘え」）」と「先延ばし前の否定的感情」、「先延ばし中の否定的感情」、「先延ばし後の否定的感情」との間で、それぞれ弱い正の相関がみられた。その一方で、「相互依存的甘え」は先延ばし意識特性尺度における「状況の楽観視」との相関もみられた。

相関分析の結果に基づき、パス解析を行った。その結果を図1として以下に示す。

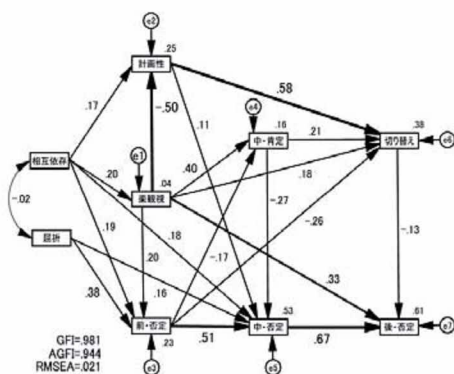


図1 「甘え」と「先延ばし」の因果関係モデル

分析の結果、「相互依存的甘え」は「計画性」「状況の楽観視」「先延ばし前の否定的感情

情」「先延ばし中の否定的感情」に正の影響を与えていることが示された。「屈折した甘え」は「先延ばし前の否定的感情」「先延ばし中の否定的感情」に正の影響を与えている。さらに、「相互依存的甘え」は「計画性」、「状況の楽観視」から「先延ばし中の肯定的感情」を介して「気分の切り替え」に影響を与えている。さらに、「相互依存的甘え」は「先延ばし前の否定的感情」、「先延ばし中の否定的感情」を介し「先延ばし後の否定的感情」に影響を与えている。

以上の結果より、「甘え」の健康度にかかわらず、人は課題を目の前にした際には否定的な感情が生じるものであることが示唆される。だが、「相互依存的甘え」は先延ばしの肯定的な面との関連もみられることから、「相互依存的甘え」が高まるにつれ、物事の捉え方や見方が広がっていくものと考えられる。このことから、「相互依存的甘え」が健康的な「甘え」であることが示唆される。また、健康的な「甘え」である「相互依存的甘え」を発達させていくことで、先延ばしを効果的に使用できるようになるものと考えられる。

一方、不健康な「甘え」である「屈折した甘え」は、課題を目の前にした際には、課題に対する否定的な感情しか生じさせないものと考えられる。

引用文献

- 玉瀬耕治・相原和雄 2004 大学生の「甘え」と特性 5 因子の関係 奈良教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 23-31
- 小浜 駿 2008 先延ばし意識特性尺度の作成 日本社会心理学会第49回大会発表論文集、174-175
- Key Word:甘え、先延ばし、発達